

十一期生の定例月例会「二木会」にむくかい 今春五〇〇回の金字塔を迎える

高校時代の友人との付き合いは、小中学や大学の友人達とのそれと比較すると一味も二味も違う。余計な遠慮や思惑無しに自由に交流を深めることが出来る・・・これは岡部会員が代表幹事を務めていた時に述べた言葉だ。

十一期生の任意団体「二木会」は、将にこれを四十年間実践して来たように思える。本年四月で月例会第五〇〇回を迎えるに当たって以下、二木会の実態と活動内容をご報告申し上げ、同窓生諸氏のご参考に供したい。

第一回は今から四二年前、一九八二年
我々十一期生は、六十年安保を経て六四年の東京五輪の前後に社会人となり、戦後経済の本格的な高度成長の一端を担ぐこととなった。同期会は大卒後約二十年を経過した八一年初秋、ある二人の同期生の業務上の電話から始まった。仕事の話は五分で終り後は旧友たちの動向情報に終始した。そして結論として同期会開催を呼び掛けてみようということになった。二人は分担してまずは各クラスより最低二人の幹

事を定め会合に事前参加してもらおう依頼。その呼びかけに応じた旧友は何と四十人超！集まった旧友の熱意に二人は圧倒され、同期会開催は即刻既定の事実となった。直ちに名簿作成・会場交渉・当日運営などの作業分担がなされ、第一回同期会は翌八二年（S五七）の二月末に三光町の新宿大飯店大ホールで開催された。短期間の準備ながら一八〇人余の出席があり、同期卒業生四四〇人の四十%を超える参加率を記録し大成功裡に終了した。

この時の幹事の提案で二木会スタート
その後の幹事慰労会の席で提案されたのがこの二木会の集いとなった。次回の同期会は三年後と決められたが三年間は長い、今回苦勞した幹事だけでも毎月一回集まったらどうか！直ちに衆議一決、毎月第二木曜の夜に集まろうということになった。というこゝとで名称は『二木会』、翌月八二年四月の第二木曜日、二木会の輝かしき第一回の会合が二十名近い参加者を得て新橋駅前のスナックで開催された。時

は將に、戦後日本の高度経済成長がようやくやく円熟期に差し掛かる頃であった。

二木会、その長寿の秘訣：

この二木会は、毎月二十人超の人が参加され、歴史的には四十年を越えるほどの長寿の会となった。これには、“同期生に会いたい”という強い情熱の他に、独特の運営や活動の仕組みが支えとなった。四十年・五〇〇回に亘る活動を支えた工夫などを後輩諸氏の皆様のためにも整理しておきたい。

A. 月例会運営の実際

第一に二木会は、組織上同期会でもクラス会でもなく、十一期生全員の親睦・交流目的の任意団体であること。そして運営上は“来る者は拒まず、去る者は追わず”を大前提に、誰もが何時でも参加できるという、同期会とは別の親睦会としての気安さを運営上の原点とした。開催日・時間・会場・企画内容などはメールなどで事前連絡してあり、事前予約無しでも気楽に立ち寄れるアットホームな雰囲気を目指した。開催曜日や時間帯はその後変わったが、その他は全く昔の儘だ。

第二は適切な会場設定。会員は皆働

き盛りの多忙な人々であるから、極力都心の交通の便のいい所を探求した。新橋駅前から、虎ノ門、青山、原宿など流浪の民を続け、九十年代に六本木の会員制レストランに定着。現在は丸の内の明治生命ビル地下に収まって十数年、地下鉄や東京駅にも近く会員各位の好評を得ている。

第三の要因は、毎行われる“プレゼン”であろう。月例会の進行は概ね左記の三時間となっている。

1. 同期生や会の動向報告／お久し振り会員の挨拶／分科会活動報告・予定 (計一時間)

2. 会食・懇談 (二時間)

3. 同期生によるプレゼン (二時間)
プレゼンのテーマは本人の研究・業務体験・趣味や日常所感など。最近では、平松会員の「新刊教養本の読書解説シリーズ」は皆の共感を得て既に十数回を数え、大森会員の「新宿の地理と歴史」は過去四く五年に互り計十回で先年完結した。酒を楽しみながらも見識が広げられるという利点が歓迎されている。

更に最近では、プレゼンの代わりに会員の子女数人による本格的アンサンブルの生演奏なども実施され大好評を

得ている。五〇〇回記念日の当日もこのグループによる祝賀コンサートが実施された。

四番目には、毎月メールで会員の自宅PCに配信される「にもく通信」の貢献も高い。会発足の初期には堀江会員による自発的レポートが全会員に送付され、その後、より客観的・網羅的内容に変身していった。

現在は幹事による活動報告・予定や講演レジメを発表者が原稿作成し嶋田編集長に提出、より客観的な記事となつてメール配信が継続されている。

この配信が、二木会の継続的發展に大きく寄与した事は間違いない。

最後に「歴代幹事体制」に触れておきたい。毎月の二木会運営に苦勞してきた歴代十組の幹事団の熱意と努力があつてこそ今日の五百回があると言える。特に二〇〇八年より十二年間に互り代表幹事を務め上げられた故稲田稔君の行動力と責任感の特筆さるべきものであり、それは現在の若林氏にも受け継がれている。

B. 各種分科会の紹介

次に月例会以外に、主として趣味の世界で同好の士が集まつて活動してい

る分科会を紹介したい。

1. ミーガン研究会 長塚宗久

(氏名は分科会幹事：以下同様)

我々十一期生は、二年次にノーベル文学賞受賞者ゴールドワージーの短編「The Apple Tree」を英語の副読本として原文のまま読まされた。都会の上流社会の学生アシャーストが旅の途中で出会った片田舎の少女ミーガンに恋をしてしまう悲恋物語。

この作品に感激した森山君(故人)など五人が、本会第一号の分科会として八十年代から九十年代前半にかけて活発に活動した研究会であつた。後日、小説の舞台ダートムアのミーガンのお墓にお参りした会員もいた。

2. テニス会 嶋田健雄

毎年春・秋の二回、定期的に小田原テニスガーデンにて三時間テニスを楽しんでゐる。アフターテニス(会食)付き。女性二人を含む八人前後が集い、八三歳とは思えぬ若さでコートを駆け回っている。驚きはテニスの腕が年々上達している方がいること！

そもそもは八五年頃、二木会の席で話が出て年に一〜二度不定期に様々なコートで開催。九一年には次頁の掲載写真のように、五十才過ぎの十六名が



「週刊現代」1991年11月9日号カラーグラビア頁より

集まり、「週刊現代」のクラス会訪問企画“集まれ！同級生”のグラビアページを飾った。皆さんの笑顔がなんとも若々しい。

3. 歩く会(山の会・里の会) 大森康晴 歩く会は「二歩会」なる名称で既に一三〇回の活動を記録している。発端は九十年に山岳部出身の大森が岡部・田中(収)両君を誘い、新宿駅南口からその昔母校前を流れていた玉川上水

の取入れ口である奥多摩摩羽村まで甲州街道・五日市街道計四二Kmを一日で歩き抜いたことにある。

爾来、都内の街歩き・近郊の里歩き・関東や中部地方の尾根・高原歩きなど多彩な企画を実施。五十代には、谷川岳・熊野古道や岩手早池峰遠征なども試みたが七十代以降は体力的制約や万が一の事故回避などの観点から山の会・里の会に分け慎重に活動してきた。有難いことに今迄に事故はない。

4. 囲碁クラブ

嶋田健雄

一年六回、偶数月の第二木曜に新宿囲碁センターにて開催。参加者はアマ七〜八段から一〜二級クラスまで十〜十五名位。皆さん熱心でいつも夕刻まで対戦が続く。

女性も二名参加。以前から二木会には囲碁愛好家が多く仲間内で対局が行われていたが九一年からは会員を募り大会を開催。〇八年には正式に会則を作成して二木会囲碁クラブがスタート。十一年からは九一年間に互り毎年秋に湯河原の囲碁民宿にて一泊合宿の囲碁大会を開催、楽しみな行事であったがコロナ禍のため宿が閉館となり中断中。囲碁も認知症予防に効果大とか？健康維持のためにも今後も続けていきたい。

5. 料理教室

今川 加代子

料理教室が始まったのは九九年。かつてのモーレッツ社員も還暦直前となり、そろそろ家庭サービスに備えねばというところで、栄養と健康を兼ねた“男の料理教室”を始めて欲しいとの依頼があった。会場も二回目からは自由が丘の「緑ヶ丘文化会館」となり、以来毎回二十名以上の参加者で二五年続き昨年十二月には第八二回に達した。

途中、単身赴任先で腕を磨いた前川会員が夫人共々約十年間講師を務めてくれた。年三〜四回の料理教室としては、だしの取り方・魚のおろし方などの基本から世界の料理までと幅広い。教室では自由に(っ)料理をする人や、時には禁断の酒瓶が十本も並ぶことも。地元の長塚会員には会場予約やごみ処理などで大変お世話になっている。

6. カラオケ(ニモカラ)会

村上興雄

会社業務で扱っていたカラオケについての二木会講演が契機でカラオケ分科会が発足、毎月例会後に歌う会を持つこととなった。

会社で企画・事業化したレーザーカラオケは、コイン収入でお店も儲かりお客さんも増えると評判になり、瞬間に日本全国に拡大。その後東南アジア

ア・アメリカ・欧州にも進出、最後の中国では、三十以上ある言語の標準化に役立つと中国共産党の推奨も得ることが出来た。

今は二木会の一員として毎月カラオケを楽しんでいる。

C. その他の二木会年間行事

1. 塩見合宿

小林雅司

一九八八年の第三回同期会の後、新宿西口思い出横丁での三次会の席で水泳部OB加藤君から一部の先輩として毎年寮に行っている、八月後半であれば一般OBも歓迎される」との話がありその年急遽計画、それ以来三二年間に亘る恒例行事として毎年開催されて来た。

初回は竹芝栈橋からI君の大型ヨットで往復することになり、中々スリリングな海の旅であったが、以降は海ほたる經由の陸路となり、二泊三日の中年オジサン天国が定着した。酒や囲碁を楽しみ、政治談議に花を咲かせた。当初は寮二泊であったがやがて寮・民宿一泊ずつ、そして最後には海老料理に魅惑され民宿二泊に変転した。

2. 「Oの会」作品見学会

吉江新一先生を中心とした美術部

OB・OGのグループが毎年秋に京橋で展示会を開催する。十一期生からは神田君故人を始めとして長塚、藤村、田中(正)、文挾の諸氏が出展しているが、例年日付を決めて二十〜三十人が会場に集まり作品を鑑賞する。その後近隣の中華料理店を貸切つての夕食会が定例コース。

3. 世田谷梅まつり梅見の会

小田急線代田〜梅が丘の北側に羽根木公園があり、そこで毎年二月に世田谷梅まつりが開催される。

その実行委員長を長年務める二木会会員の斉田氏の取り計らいでここ十数年梅見の会が開かれている。毎回十五〜二十人が参加。紅梅・白梅を愛でた後は皆で早い夕食・ダベリング。

D. 十一期生の「同期会」について

同期会は当初は三年間隔、二〇〇〇年以降は定年退職者も増えたことから二年間隔となり、直近では昨年六月に第十七回が約七十名の参加を得て開催された。これは通算二年半に一回の頻度となる。当日には毎回、改定名簿と返信葉書記載の近況を集めた報告集の二冊の配布が恒例となっている。

最後に海外や地方、更には外出困難



竹原会員のご令嬢を中心とする4人の音大卒業生による
二木会500回記念演奏会

者も自宅で参加できるオンライン分科会が、依田会員を中心に企画実施され軌道に乗りつつある。年四回開催予定。乞うご期待。(十一回 大森康晴)